

一三頁の記事には、ペリオ教授が摩尼光佛教法儀略と下部讚とに關する簡単な解題的報告をなし、前者についてはその全譯と註解とが近く同誌に掲げらるべき旨を記して居る。併し其の後本年四月號までの同誌にはまだ掲載されてゐないやうである。

藤田博士は内藤博士還曆記念支那學論叢で公けにされた「焉支と祁連」の數節に於て、曾て自分が史林に書いた「天と祆と祁連と」に於て、自分が顏師古の天山は「卽祁連山也、匈奴謂天爲祁連、祁音巨夷反今鮮卑語尙然」或は「祁連山卽天山也、匈奴呼天爲祁連、祁音士夷反」という註釋に誤られて兎角の論を立てたことを指摘せられ、祁連山を天山とする顏師古の説は到底成立することの出來ないものなることを縷述し、而して師古が祁連を天と解したのは唐代の鮮卑語に附會して之を旁證せんとしたに過ぎないだらうとし、更に祁連は、*Fraiss* の義であるトルコ語 *serin* に對したのではなからうかという假定を提出された。博士の該博な識見は自分にとつて啓蒙少からざるものであり、特に齊召南の説を觀過して居つたのを知り得たことの如きは全くその恩惠であつて、深く感謝の意を表したい。只だ自分の論述に對する批評の要點に就いては多少辯じて置かねばならぬ點があるやうに思ふ。もとより今此の漫録に於てすべてを盡さうとするのでは無く、極めて根本的問題に範圍を限らねばならぬ。

博士は祁連山と天山とを〓詳しく言へば此等兩山の所在を〓同一視する師古の考の不可なることを縷々説述せられたが、此の事は既に以前から内外の學者の認めて居る所^①で、今日争ふべき餘地は無い。ところで博士は「祁連山卽天山説の誤謬なるは後世學者の一般に認むるところなるに拘らず何が故にそれが匈奴謂天爲祁連といへるを信ずるのであるか」というて、師古の註釋を尊重するものを難詰された。然しながら、此の難詰は少々無理ではあるまいか。師古がその所在について祁連山と天山とを混同したが爲に、「匈奴謂天爲祁連」という解釋までが全く權威を